月刊誌『発明』における火星を多角的に捉えた連載記事の試み

A Series of Articles in ’THE INVENTION’ Magazine to Cover Many Facts of Mars

新井 真由美 [1]; 原澤 幸伸 [2]; 橋岡 智和 [2]
Mayumi Arai[1]; Yukinobu Harasawa[2]; Tomokazu Hashioka[2]

[1] 筑波大・院; [2] 発明協会・「発明」誌
[1] Univ. of Tsukuba; [2] The Invention, JIII

https://www2.books.jiii.or.jp/store/top_f.jsp

社団法人発明協会では発明の奨励と知的財産権制度の普及を図るため、月刊誌「発明」を発行している。2006 年で創刊 100 周年を迎えた発明誌は、2006 年 1 月から表紙や紙面、記事や企画のリニューアルを行った。本誌では毎月さまざまなテーマに基づき記事を組んでいるが、リニューアルに伴い知的財産以外のページの見直しも行った。具体的には幅広い読者層の獲得を目的に、時代に即した記事の提供や特集、科学トピックスの紹介を強化することにした。その中で、2006 年 1 月から新たに「Mother Mars(マザーマーズ)」というシリーズ連載をスタートさせた。ここでは、宇宙や火星、科学に携わるさまざまな研究者や専門家を紹介し、彼らの素顔に迫ることで科学技術を読者により身近に感じさせることを目的としている。この連載を企画し執筆を担当している筆者は、紙面ではナビゲーターとなりインタビューを行っている。このシリーズ名のマザーマーズは発明誌の編集長のアイディアである。「母なる星・地球」ではなく「母なる星・火星」というユニークな名であるが、実は「火星に人類が住めるか」という壮大な目標を持って様々な専門家にインタビューを行ってきている。

日本の宇宙開発における火星探査は 2003 年 12 月の火星探査機「のぞみ」の火星軌道投入の断念により、下火になってしまった。一方、2003 年に打ち上げられた NASA の双子の火星探査機のスピリットとオポチュニティは順調に成果を挙げている。2006 年に火星に到着した NASA の火星偵察衛星のマーズ・リコナイサンス・オービターは高解像で火星の地表面の撮影に成功。NASA によると 2007 年打ち上げ予定のフェニックス計画では、火星を 50cm 掘り凍土を調べ、20km までの大気（雲や霧、ダストプルームの運動）を調べるという。そして、2009 年のマーズ・サイエンス・ラボラトリ、スカウトミッション、サンプルリターン計画と続いている。約 2 年毎に探査機の打ち上げが予定されており、有人火星探査も夢物語ではなくなってきた。火星に人類が行く日もそう遠くはなく、そのとき日本の様々な専門家の応援と協力が必要であってほしいと考えた。日本が将来どのような探査をして火星の科学に貢献できるか、発明誌の連載を通じて火星と日本人研究者や専門家の多角的なつながりを探り、明るい日本の科学技術、宇宙開発の未来を読者に届けられないかと考えた。

これまでにマザーマーズで紹介していた人物とテーマ、火星との関係を以下に紹介する。
2006 年 1 月号毛利衛氏（日本科学未来館館長／宇宙飛行士）科学とアートの融合や中国の宇宙開発、映画「ミッション・トゥ・マーズ」を考察。
2 月号池上俊郎氏（京都市立芸術大学教授）建築学の視点から持続可能な社会をモデル化したエコデザイン、宇宙デザイン「スペースフトン」、火星における循環型再生都市の設計について紹介。
3 月号栗田敬氏（東京大学地震研究所教授）火星の地形学的研究、とくに火山や表面地形について紹介。
4 月号池下章裕氏（スペース・アーティスト）宇宙の CG アートとくに火星の作品紹介。科学とアートの融合、宇宙の絵を描くことの原動力など。
5 月号笹沢教一氏（読売新聞社記者）日本人で初めてメディアの立場から火星模擬基地体験を行う。日米の軍事や科学技術等の差を紹介。
6 月号北原あかね氏（スペース・アドベンチャー日本事務所代表）民間宇宙旅行の現状、火星旅行の実現性を紹介。
7 月号下田真吾氏（理化学研究所研究員）宇宙探査ロボットの知能化、次世代ロボット、マーズ・ローバにみる機械の知能化を紹介。
8 月号松岡彩子氏（宇宙航空研究開発機構助教授）火星や水星の磁場研究について。火星探査機「のぞみ」の 1 ビット通信のエピソードや水星探査計画の「ベピ・コロンボ」を紹介。
9 月号佐々木晶氏（国立天文台教授）小惑星イトカワの表面や「はやぶさ」による宇宙風化、火星研究の日本における展望について。
10 月号平朝彦氏（海洋研究開発機構理事／地球深部探査センター長）統合国際深海掘削計画で活躍する地球深部探査船「ちきゅう」の特徴やメリットについて。映画「日本沈没」にかけて人類が地球から火星へ居住する前の心得など。
11 月号山下雅道氏（宇宙航空研究開発機構教授）火星で自給自足を営む宇宙農業研究の取り組み。日本の伝統の火星へ応用、火星での暮らしについて。
12 月号新井真由美氏（筆者）マザーマーズの 1 年を振り返って。火星の魅力について。
2007 年 3 月号井上夏彦（宇宙航空研究開発機構）宇宙でのストレスと宇宙医学、有人火星旅行時に発生する心理支援について紹介。